

橋の夜



橋の歌

小林豊



著者——小林 豊

大正十四年大阪府に生まれる。旧制大阪外語独学部卒。

現住所——大阪府岸和田市南上町二―三―二一

橋の旅

一九七六年十二月十月初版発行

発行者——臼井浩義

*

発行所——株式会社白川書院

京都——京都市左京区北白川追分町八七 電話〇七五―七八一―三九八〇 〒六〇六

振替京都九二二

東京——東京都新宿区左門町三―四 電話〇三一―三五三―三三四四 〒一六〇

振替東京九―一七六四五〇

印刷所——土山印刷株式会社 製本所——新生製本株式会社

© Yutaka Kobayashi 1976

橋
の
旅
●
小
林

豊

白
川
書
院

■ 目次

第一部 橋と人間

6

一章・祈りの橋

42 二章・出会いの橋 別れの橋

72 三章・親しみの橋

106 四章・愛しみの橋

134 五章・無常の橋

158 六章・戦いの橋

第二部 橋・断章

188

□ 散見・京都の橋

238 232 228 224 220 216 210 204 198 196 192

□あとかぎ

□橋の町

□橋の名前

□ゴッホとはね橋

□くじら橋

□鳴門ドイツ橋

□祖谷のかずら橋

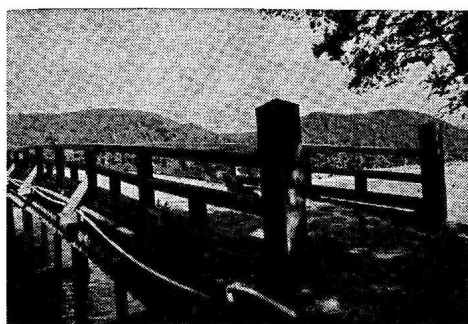
□十津川の野猿・吊り橋

□散見・大和の橋

□南禅寺水路閣

□修学院離宮の橋

第一部 橋と人間



宇治・橘橋

一章 祈りの橋

宇治へはよく行く。秀吉が、茶の湯に使う水をそこから汲ませたという宇治橋^{うじはし}の三の間の勾欄にもたれて、上流の塔の島や、橘橋^{たちばなはし}という姿やさしい木橋のあたりを眺めていると、不思議と心が安らぎ、背後を駆け抜けて行く車の騒音もひととき脳裡から消えてしまう。ここからの宇治の朝霧の眺めは、

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに

あらはれわたる瀬々の網代木^{あじろぎ}

という『百人一首』権中納言定頼の古歌をしのばせ、いまでも風雅を愛する人たちから好まれているようだ。

平等院の鐘の音に耳を傾けながら橘橋を渡って塔の島へ降り、西大寺の僧叡尊が、弘安九年（一二八六）宇治橋架け替えのとき、橋の安全を祈って造立した十三重石塔のあたりから宇治橋を眺め返す。薄桃色に塗った勾欄や緑の擬宝珠も、ある距離を置いて見ると、渋さのまさっ



宇治橋・断碑銘文拓本

た宇治の景觀によくそぐって美しいとはいえるだろう。この配色は和田三造画伯が選ばれたと聞いた。俗っぽい、という非難の声もあったが、よく見れば、この配色がいちばんすぐれていると、これは先年、故人になられた土地の山本英治さんのお話しであった。山本さんは、戦前の無産運動の闘士、山本宣治の息子さんである。

流れに足を浸した真つすぐな橋脚と、心持ち弧を描いて反り上がった百五十三段の桁はコンクリート造りだが、欄干は木造りで、日本伝統の桁橋の持つやさしさを漂わせる——そう感じたとしても、あながち、今日の無惨な都会生活に疲れ、鋼で武装するかのような近代橋に倦きたものの感傷のゆえではないだろう。

塔之島から対岸の宇治神社のあたりを眺めると、豊かな水を湛えた疾い流れが眼前に横たわる。

湍湊横流 其疾如箭

(べんべんたるおうりゅう そのはやきことやのごとし)

宇治橋断碑銘文の作者がこう書いたのは、かりに大化二年（六四六）造碑説を信じるとすれば千三百三十年前であった。この簡潔無比の銘文はいまも宇治川の相を確かに伝えるといつてよいだろう。



宇治橋・三の間

橋のないころ、ここには渡し船が通っていたといわれるが、しかし、船渡しがままでなかったことは流れの激しさからも容易に想像できる。川を前にした古代の旅人たちは途方に暮れてたたずんだに違いない。断碑は続けて、

修々征人 停騎成市

(しゅうしゅうたるせいじん うまをとどめていちをなす)

多数の旅人が馬をとめて岸にひしめき合った。

欲赴重深 人馬亡命

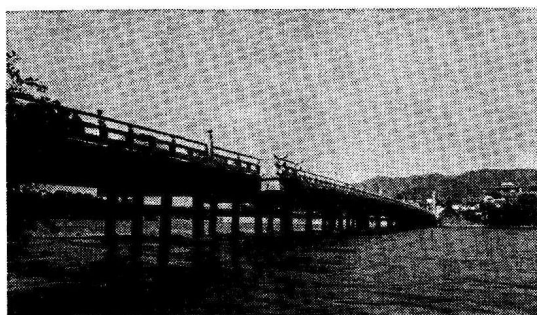
(じゅうしんにおもむかんとすれば じんめいをうしなう)

思い切って深みに入って行くと、急流に押し流されて人も馬も命を失ってしまう。

従古至今 莫知航葦

(いにしえよりいまにいたるまで こういをしるなし)

だれ一人として船で渡ったものもない。



宇治橋

というありさまだった。「葦」は小さな舟のことで、銘文の作者は渡し船が通ったことを認めていない。

びわ湖から流れ出る水は、近江、山城の両国を南へ下り、宇治の里で西へ横流するあたりで近江と大和を結ぶ大和街道を断絶させる。ここに架橋して衆生を済度することは、古代の宗教人の夢であり、その実現は旅人たちの熱い願いであった。

大化二年、ここに初めて橋がかかった。よく知られているように、架橋者の名は、宇治橋の断碑の銘文によれば、奈良・元興寺の僧、道登^{どうとう}である。『続日本紀』は道登の後進、道昭の名を挙げているが、大化二年といえは道昭十八歳の若年にすぎないところから、今日では道登説が有力だという。しかし、道昭が後年、各地に造橋を含む土木工事に活躍したことが知られているので、道登が道昭を助けて架橋したという道登・道昭説も捨てられていない。『帝王編年記』は、道登の名のみ記した銘の全文を挙げながら、見出しには「元興寺道登・道昭、奉勅始造宇治川橋」と書いている。古来、論争の絶えない問題だが、ここでは道登説を採^とっておく。さて銘文はなおも続く。

世有釈子 名曰道登

(よにしゃくしあり なをどうとうという)

出自山尻 懸満之家

(やましろえまんのいえよりいでたり)

大化二年 丙午之歲

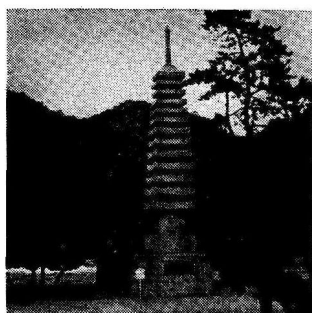
(たいたかにねん へいごのとし)

構立此橋 濟度人蓄

(このはしをこうりゅうして じんちくをさいどす)

狭い川なら板をかけ渡し、橋が動かないように両端を杭で挟み止めた板橋、少し広い川では、川中に杭を打って板を渡した打ち橋とか、かずらで結んだ筏や舟に板を載せ、その上を渡る舟橋、浮橋（これらはすでに『万葉集』に歌われている。また鎌倉期の絵図『一遍聖絵』^{いっぺんひじりえ}などで見ることができる）などが、そのころの貧しい日本の橋の姿であったろうから、宇治川のような水勢の激しい大河に橋を渡すことはよほどの難工事だった。その様子を後世に伝えるものは何も残っていない。ただ道登は相当な靈力の持ち主であつたらしく、奈良山の谷に野ざらしになったどくろを憐み、従者に命じて樹上に置かせたところ、どくろが生き返って礼をいに来た、ということが『日本靈異記』に書かれている。構造の簡単な木桁橋であつたことは確かだが、それでも長さ八十三間であつたと『山州名跡志』は伝えているから、完成したときの人々の驚きは、そうした素朴な情念を喪失したかに見えるいまの日本人が、天草五橋や関門橋の完成によって受けた印象とは比べものにならないほど強烈だったに違いない。場所は、いまの橋より上二丁ばかりのところであつたという。

行基の例に典型的に見られるように、古代のすぐれた僧は土木行事にも活躍した。彼らが、



宇治川治水祈念の
十三重の塔

そのころの最高の知識人だったからであるが、池をうがち、道を開き、流れに橋をかけることが、とりも直さず、衆生を済度するという仏教の理想を実現することであった。宇治橋架橋という時代の悲願に挑んだ道登の胸中にも、越えがたい流れを前にして迷い、悩む衆生を此岸から彼岸へと済度する宗教的な情熱が燃えていたことはいままでもない。「済度」とはもともと「水を渡る」ことを意味し、「渡す」あるいは「度す」とは人々（の魂）を救済することでもあった。橋を架けることは、だから、どのような他の土木工事よりもすぐれて宗教的な営為であった。断碑の銘文は、このときの道登の心願を、

即因微善 爰発大願

（すなわちみせんによって ここにたいがんをはっすらく）

結因此橋 成果彼岸

（いんをこのはしにむすんで かをかのきしになさん）

法界衆生 普同此願

（はっかいのしゅじょう あまねくこのがんにどうじ）

夢裏空中 導其苦縁

（むりくうちゅうに そのくえんをみちびかんことを）

と描いている。道登は架橋という微善によって、此岸と彼岸を結ぼうという大願を抱いた、

世の人々よ、この願いに賛同して、冥々^{めい}のうちに世の中の苦を解決に導いてほしい、というのである。

道昭の弟子に当たる行基も、こうした発願から、後に宇治、瀬田（勢田、勢多とも書くが、本文では瀬田で統一する）と並んで三大橋とたたえられた山崎橋^{やまざきばし}を淀川に渡した。『作者部類』によれば、

神亀二年（七二五）九月、行基、諸弟子を將て山崎河^{ひまき}に行到^{いた}る。

山崎河とは、山崎合戦で知られる、あの摂津・山崎の地を流れる淀川のことである。ここは、古くから渡し場として淀川交通の要所だったが、男山と天王山とに南北を押さえられて狭くなったところに、木津、宇治、桂の三川が合流するので、降雨期の流量がすさまじく、架橋の一大難所だった。行基は渡船を待ったがなかなかこない。たまたま、川中に一本の大きな柱があった。行基が問うと、ある人が「往昔、尊船大徳度^{そんせんたいとくた}す所の橋柱なり」と答えた。そこで、

爰^{こゝ}に大菩薩発願して同月十三日より始め、山崎橋^{やまざきばし}を度^{わた}す。

「尊船大徳」とは道昭のことである。すでにここには道昭が架橋していたものと見える。

このとき行基は架橋の成功を祈って千手観音像を彫ったが、橋は竣工と同時に洪水で流失し

たという。ちなみに『今昔物語』巻十六には「十一面観音、老翁に變じて山崎橋柱に立ちて語る」という、本文の欠けた表題があるが、十一面観音は、あるいはこの千手観音と関係があるのかもしれない。『伊呂波字類抄』に、摂津国島上郡の桜井寺に伝わる十一面観音像造立縁起譚として、康和四年（一一〇二）ある富人の夢に「山崎橋の二番目の板」と名乗る人物があらわれ、

朝夕暴露して汗穢を被る。我を採りて仏像となせ

と語ったことが伝えられている。仏教説話のにおいの濃い話だとしても、橋に祈りをこめた古代人の心情がよくうかがえる話ではなからうか。いまも形を変えて山城の泉川（木津川）にかかる泉大橋もいずみおおはし行基架橋として古くから知られている。

古の聖ひじりたちが、想像を絶する苦難のすえに宇治橋や山崎橋などを架けたのは、大化改新に始まる律令体制——中央集権強化の矛盾に宗教者として心を痛めたから、というのが定説である。ぼう大な物資や人物が地方から中央へ流れてくるようになったものの、当時の交通施設は非常に貧しく、宮殿や寺院の建設に徴発される人民は往還に苦しみ、路傍に窮死するもの数え切れなかった。彼らは宗教者の自覚からそれを放置することができず、自らの手で架橋を行なったのだった。



橋寺・放生院常光寺

さて宇治橋は、その後も観理、道慶といった宗教人によって修築され、鎌倉時代の弘安年代までは、ことごとく僧侶の手で経営された。そして弘安九年（一二八六）観尊によって再建されたのを機会に、応仁の乱で寺禄を失うまでの間は放生院常光寺が管理することになる。

常光寺は、宇治橋東詰めの北側にいまもある。「橋寺」の名で通る小さな堂宇で、道登架橋のとき、橋を供養するために建てられたというのは俗説だが、「橋寺」といういかにも日本的にやさしいその呼び名と、境内にある宇治橋断碑に惹かれてか、遠くから訪れる人も多い。

初めてここを訪れたのは、境内の木立ちから蟬時雨の降り注ぐ暑い日であった。短い、しかし急な石段を上がって左に折れると、つましい本堂の前の庭に、天ヶ瀬の自然石だという、背丈にも及ばぬ黒ずんだ、ひび割れの入った碑が、屋根囲いの中に日射しを避けてひっそり立っていた。屋根の上には年を経た百日紅が紫紅色の花を咲き盛らせていて、東京からひとり訪ねて来たという大学生と並んで、九十六文字、四言二十四句を三行に分けて刻んだ、中国六朝風の美しい碑文に見入ったのだった。いま一度、その全文を書き連らねてみる。

浼浼横流 其疾如箭 脩脩征人 停騎成市

欲赴重深 人馬亡命 從古至今 莫知航葦（竿）

世有穉子 名曰道登 出目山尻 慧滿之家

大化二年 丙午之歲 構立此橋 濟度人蓄